



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ガーリャール朝末期マシュハドの為替と金融：中央アジアとの関係を中心に
Author(s)	水田, 正史; MIZUTA, Masashi
Citation	日本中央アジア学会報, 20, 64-65
Issue Date	2024-11-30
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.20.64
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98890
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	journal article
File Information	JB20_007mizuta.pdf



ガージャール朝末期マシュハドの為替と金融 — 中央アジアとの関係を中心に —

水田 正史

1891年4月、イギリス海外銀行にしてイランの独占的発券銀行たるペルシャ帝国銀行のマシュハド支店が開業した。マシュハドはイランの主要都市の1つであり、イラン各地、中央アジア、アフガニスタン、インドなどからなる交易と金融のネットワークの中心でもあった。したがって、同地には同行支店開設以前から多数の商人や金融業者が営業していた。

当時、マシュハドでは貨幣が不足しており、ロシアへの送金のためにロシアの金貨とルーブル紙幣が買い占められていた。ペルシャ帝国銀行マシュハド支店の開設は、この貨幣不足を解消するものとして期待された。

同行が銀行券を発行するや、その流通に、地元金融業者から次のような対応が見られた。すなわち、彼らは、同行銀行券所持者の無知に付け込み、それをディスカウントで買い、好機が訪れればプレミアムで売ったのである。

同行銀行券が流通していたのは、イラン領内においてだけではなかった。中央アジアにも流出していった。イギリス海外銀行券がロシア領で流通していたのである。さらにマシュハド内部に目を転ずれば、イランの本位貨幣ゲラーン銀貨のみならず、トルコ・リラ、ブハラ・ティッラー、インド・ルピー、ヘラート・ゲラーン、インド・カレンシー・ノートなどが流通していた。つまり、マシュハドおよびその周辺地域は通貨の混沌状態であったのである。

通貨の混沌状態、ということになると、為替の問題に関心が向かうことになる。当時、マシュハドでは、イラン通貨ゲラーンがポンドに対して低落しつづけ、それは同地のみならず、同地を州都とするホラサン州全体の交易に深刻な影響を与えた。

この外国為替問題に加えて、イランの銀貨と銅貨の交換比率の問題がこの頃、現れた。銅貨が銀貨に対して減価したため、銅貨で支払いを受けていた貧民たちは大きな打撃を受けた。

次いで取り上げるべき重要な事実として、ルーブル紙幣の問題がある。当時、マシュハドの商人たちは商品購入のためにインドに送金するのに、為替手形を使うことはめったになく、ルーブル紙幣を使ったというのである。このルーブル紙幣は、マシュハドの聖廟への巡礼者などによってマシュハドにもたらされ、マシュハドで使われる。地元の商人たちはそれを郵

便でオデッサ(オデーサ)へと送る。オデッサでそれらはポンドへと替えられ、さらにロシアの銀行によってボンベイ(ムンバイ)へと送られる。つまり、ルーブル紙幣がこれら広域における「国際通貨」であったのである。この「ルーブル国際通貨システム」は突然現れ、突然無くなったという。

通貨の混沌状態はこれらにとどまらなかった。イランのゲラーン銀貨が中央アジアへと輸出されたのである。ペルシャ帝国銀行がこの交易から利益を得た。同じ頃、ロシア政府が対イラン(ホラサン州)国境に為替事務所を開設した。

1903年あるいは翌年の時点で、マシュハドにはペルシャ帝国銀行以外にロシアの国策銀行であるペルシャ割引貸付銀行が存在した。同行は、銀行業務に加えて、自己勘定と他人勘定で交易業務を行っていた。

この頃、ゲラーン銀貨の中央アジアへの輸出が継続的に減少した。その理由の1つは、トルコマン人が、ゲラーンよりも為替の変動を受けにくいルーブル銀貨を好むようになったこと、であった。1905年初めには、ゲラーン銀貨が熔かされて地金の形でロシア「本土」へと輸出された。

以上のように、本発表では、グレート・ゲーム(アジア西部における英露の角逐)の焦点たるイラン北東部と中央アジアでの英露の在外銀行の活動と同地域の為替・金融との関係を解明することを試みた。このことにより、20世紀初めのアジア西部の諸地域における政治変動の本質を解明する上での新たな視座を獲得する可能性が開かれたのではないかと考える。

討論者の植田暁氏をはじめ、コメントを頂戴した方々に厚く御礼申し上げる。頂いたコメントにより訂正ないし留保すべきと感じた点もあるが、「発表要旨」なので発表内容をそのまま要約するにとどめた。

(大阪商業大学総合経営学部)